

DO-RAMA
YOKOHAMA
150

TEAM SUGITA



ハマ魂〜ヨコハマ絵巻〜

出
産
痛
快!!

激動の横浜を生きたヨコハマスピリッツ

踊ルよこはま
唄ウよこはま

2009年5月16日(土) 14:00 杉田劇場
17日(日) 14:00 杉田劇場
6月 7日(日) 14:00 栄公会堂

主催: DO-RAMA YOKOHAMA 150 実行委員会
 財団法人横浜開港150周年協会

www.dorama-y150.jp

ハマ魂～ヨコハマ絵巻～

「お茶場」と呼ばれた製茶工場で働く女性達や

ハンカチ工場で働く“ハンケチ女”達が

芝居一座と織り成すひと騒動。

ハマの子ども達と外国人教師との出会い、

高級クラブだった「チャブ屋」での出会いと別れ…。

開港から数年後の横浜を駆け抜けた人々の、

出会いを楽しみ未来を創るハマっ子スピリッツを

3話のドラマで綴る、横浜絵巻。

DO-RA-MA YOKOHAMA 150 市民クルーより

横浜開港以来今日に到るまで、先人達の熱い思いと活躍の姿は日々引き継がれてきました。そして私達は、今、開港150周年の中にいます。

今日までの横浜のプロセスを皆で見つめ直し、光をあて、改めて確認し合い、次世代へ

パトタッチできるようにしたい…。

一時的なイベントで終わりにたくない…。

DO-RA-MA YOKOHAMA 150は、市民自ら参画し、こうした思いを実現しようとする市民参加型のプロジェクトです。

(財)横浜開港150周年協会、DO-RA-MA YOKOHAMA 150実行委員会、プロの専門スタッフ等々、関係者の皆さんと一体となって、企画推進してきました。一昨年の7月、「ドラマの種探し」を皮切りに、市民クルーの実活動はスタートしました。高島学校、ハンケチ女、お茶場唄、チャブ屋、野球の始まり等々、横浜ストーリーのドラマづくりは、プロの専門スタッフのご指導を得て、今日に到りました。

舞台の出演者は皆一般市民で、子供から大人まで男女合わせて400名近くにのぼります。

4つのチームに編成し、楽しく厳しい練習を稽古を積み重ねてきました。

今では出演者全員、情熱をもって役づくりに励み、素人の域を脱しつつあります。

歌あり、踊りあり、演劇ありの舞台は、各地区8会場12ステージの規模で、5月16日から8月30日の間、各地区で逐次開幕します。

舞台の裏方でサポートする市民クルーは、これまでの参加者数は総計100名近くにいたっており、「オリジナルTシャツの自主製作販売」や「各地区の福祉施設で作られるロゴ入りクッキーや陶器等のお店を、当日会場に出店頂く」などの企画も進めています。

これは、色々な方達に150周年事業に出来る限り多く参加して頂き、DO-RA-MA YOKOHAMA 150自身の輪を広げていきたい、との趣旨で企画した活動です。

そんなわたしたちDO-RA-MA YOKOHAMA 150が、満を持してお送りする「ハマ魂～ヨコハマ絵巻」どうぞ、お楽しみください。

廣島 亨

STAFF

演出・総合ディレクター☒ 太宰 久夫
 脚本監修☒ 清水 東
 音楽監督・作曲・編曲☒ 谷川 賢作
 美術空間デザイン☒ 土屋 茂昭
 衣裳プラン☒ 中矢 恵子
 振付☒ 振付稼業air:man
 振付☒ 相原 睦(湘南ダンスングスクール)
 歌唱指導☒ 吉村 温子
 編曲・シンセサイザープログラミング☒ 深掘 瑞穂
 キーボード演奏☒ 磯村 由紀子
 ディレクター☒ 四大海(劇団S.W.A.T!)
 ☒ 杉浦 圭太(アートインライブ)
 ☒ 瀬戸 カオリ(//)
 ☒ 叶 雄大 (//)
 ☒ 伴 拓也 (//)
 ☒ 齋木 理恵子(//)
 ☒ 下川 涼子 (//)

舞台監督☒ 杉村 向陽 (マルス・エイ・ソル)
 照明プラン☒ 山田 茂、金子佳裕(シアター・ブレン)
 音響プラン☒ 山北 史郎 (TES)
 映像監督☒ 小林 敬直
 映像☒ 吉住 知洋
 インストラクター☒ 大西 由紀子(演劇百貨店)
 衣裳製作協力☒ 学校法人 岩崎学園
 創作・制作サポーター☒市民クルー 一同

制作・プロデューサー☒後藤 圭 (劇団かかし座)

1

ミッションホーム

地元とお茶場の子ども達は仲が悪く、いつも小競り合いを繰り返している。ある日、異国人のいる学校の鐘を鳴らした方が勝ちだという話になった。突然鳴り響く学校の鐘。やがて物語は地元の子ども達とお茶場の子ども達、ミッションホームの子ども達、大人達を巻き込んだページェント作りへと展開していきます。

小川 ひとみ	金井田 かのん	ゆめ	大坪 倫太郎
香川 弘子	私市 菜月	友里愛	金岩 優輝
関戸 裕子	草島 叶実	吉村 千春	楠葉 涼雅
ペコちゃん	白川 月美	あきほ	ゲンゴロー
南崎 愛子	末広 みなみ	小泉 結佳	関藤 啓人
村上 和美	杉原 有香	小松原 未優	大一夢
村田 篤樹	鈴木 梨英	さくら	長谷川 輔
AYAKA	たかの 愛	瀬川 美桜	ミックキー
ERIKA	土田 莉花	竹内 りか	三橋 祐大
MAHO	野尻 夏帆	ちひろ	
MOE	ハンナ	ちほの	
RANRAN	東園 真紀	トモ	
あおい	福居 友海	中尾 夏実	
あすか	ほなみ	中村 りさ	
あゆ	まゆ	馬場 風音	
池田 優	みなみ	松田 成美	
薄田 汐梨	山口 菜羽	みちる	
大作 悠月	山本 佳奈	REN	
大村 花菜子	幸穂	あゆむ	

2

チャブ屋の女たち

チャブ屋の女主人・ジュンコはピアノを弾き始めるが、いいところで終わってしまう。それをきいていたチャブ屋の女・彩乃は、「最後まで弾いてよ!」と頼むがジュンコはピアノを弾かない。そしてジュンコは、自分の過去の恋を語りだす。語られる若き日の恋物語とは…。そしてその恋の結末は…。

ジュンコの恋は時を越えられるのか?

TaTSUyA	中村 緑
岩崎 小麻里	新倉 順子
小山 ゆかえ	飯田 みつひろ
菅沼雄三	はせがわさとし

3

みんなの賑座

舞台はお茶場とハンケチ工場。女たちが歌いながら作業をしている。女達は賑座にかかっている一座の大ファン。芝居見物を大きな楽しみにして日々を暮らしている。一方賑座の一座では新人役者が逃げてしまって大騒ぎ。一座の子ども達、看板役者の光二郎、ファンの女たちが巻き起こす騒動の結末は…。

賑座の舞台で繰り広げられる盛大なレビューショー。そこへお茶場女とハンケチ女も加わってハマの港の夜は更ける。

天野 昭子	小野 紀美	はせがわさとし
川島 優子	田部井 実夢	秦 政子
菊池 サトミ・リチェ	西川 恵里香	池田 朋子
佐久間 縹	ひなこ	木村 亜希歩
角 雪絵	藤岡 茉由	高橋 秀子
相馬 薫	悠姫	菱倉 あゆみ
三尋木 節子	れん	松崎 清美
Chifuyu	南崎 徳彦	村山 都起子
FUMIKA	飯田 みつひろ	

(以上順不同)

※出演者は予告なく変更になる場合があります。

地元家族

かじ ひろこ
橋本 久之亮
山田 航介

劇中に登場する用語解説

【ハンケチ女】



裏町にどれ程あったか分からない「絹ハンケチの縁かがりや刺繍加工をする小工場や下請」で働く女性達をいう。金遣いが荒く、町中を群れて歩き、目立った存在であった。好んだ芝居が「賑座」の、通称「ハンケチ芝居」で、人気役者に熱狂した。控え目で奥ゆかしい女性像が一般的であった時代、不良少女の一群と見られていた。親元を離れて暮らす女性達は、偏見の目で見られ勝ち。彼女達が首に巻いたハンケチは、自立し自由に生きる(時代の先端をいく)「女性達の誇り」であったのかも知れない。

【お茶場】



茶屋敷(居留地内で茶の輸出を行う外国商館)の中や、隣接の地所に建てられた石造の「お茶の再製工場」のこと。集荷したお茶を焙(ほう)じて再製し、暑さや湿気で変質しないようにして輸出する。

「ひとつの工場で300程の炉があり、直径二尺・深さ一尺五寸のナベがのる。炉に火をおこし、女工さん達がナベをはさんで向かい合い、お茶をかきまわしながら行う。現場監督が一尺棒をもって“それ、それ”と気合を入れる。お茶場は蒸気で灼熱地獄みたいに暑い。仕事が終わると出口に列に並び、日当(天保銭16枚、良いときは22枚)をもらう。良い稼ぎ(天保銭12~13枚で米二升の換算)であったが、厳しい労働とその日暮らしの日々。なぐさめは、作業の中で「お茶場歌」を歌うことだった。」<「横濱今昔」(昭和32. 西村栄之助著)から抜粋>



【チャブ屋】

本牧周辺だけにあった特殊な社交場。遊郭でも、レストラン・ホテルでも、飲み屋でもない。これら全部をあわせ持ち、ダンス場もある「絢爛で華やかな場…」。洋館2階建てで、「1階がダンスホール、2階個室」が主な造り。

始まりは、開港以降、本牧と根岸を通る「外国人遊歩道」にできた休憩所。英語では「Chop-house」と呼ばれ、そこから「チャブ屋」になったとの説が有力。

明治中期から太平洋戦争頃まで続き、全盛期は明治後半から大正にかけて。

中でも「キヨハウス(ホテル)」は最も有名。

当初は外国人対象だったが、途中から日本人客も。谷崎潤一郎等文壇人も通った。料金は高く、当時の大卒初任給の半分位が一晩で消えた。そこで働く女性達も、遊郭と違って自ら進んで働きに出て、暗さもなく、高収入を得ていた。

淡谷のり子が歌う「別れのブルース」は、元々「本牧ブルース」の題名で、チャブ屋から港を眺めた歌だといわれている。

